

《論 説》

リカードウの未完の遺稿

——「絶対価値と交換価値」——

羽 鳥 卓 也

1. リカードウの絶対価値の尺度の探索

リカードウがかれの生前最終版となった『経済学原理』第3版の刊行を準備した時、価値論の章に大幅な加筆補正を施したことはよく知られている。しかし、われわれが注意しなければならないことは、リカードウ自身は改訂時すでにこの改訂された価値論の章をけっしてかれの価値論研究の最終決定版とはみなさなかつたように思われる節があるということである。かれが第3版の刊行に備えて価値論の章の改訂作業に着手したのは、1820年8月末ないし9月初めと推定されるのだが、ちょうどその頃かれは一通の私信のなかでその改訂の方針に言及している。20年9月4日づけのマルサスあて手紙のなかのつぎの一文が、すなわちそれである。

「私は拙著の新版が出る前に、第一章のなかに少しばかり訂正を施すつもりで、この章を検討しております。私の仕事がかわめて難かしいということは分っておりますが、私見をもっと明瞭で分り易いものにしたいと思っております。私は大兄の攻撃の若干の点について私見を擁護するつもりでしたが、熟慮した結果、私が十分に力を発揮するにはあまりにも多くのことを言わなければならないので、きわめて不都合な仕方であつた拙著の分量を拡大することになり、そのうえ読者の注意を拙著の主要論題から絶えず逸らすことになると思うのです。もし私が少しでも私見を擁護しようとするなら、私はなに

か別の出版物のなかでやるべきだと思っています。」⁽¹⁾

この文面から読みとれるように、かれは第3版のための価値論の章の改訂作業に着手するにあたって、みずからこの改訂作業にある種の限定をおこうとしたように思われる。すなわち、かれはかねてマルサスから寄せられていた批判に対する全面的な回答の作成を第3版でも留保したいと記している。なぜ留保するかといえば、価値論の章のなかにマルサスへの全面的な反批判の試みを盛りこもうとすれば、それは「不都合な仕方で拙著の分量を拡大することになって読者の注意を拙著の主要論題から逸らす」おそれがあると思われるからだというわけである。

それなら、当時のリカードウが第3版の価値論の章のなかではなく、「なに
か別の出版物のなかで」将来遂行すべき課題と考えたものは、いったいどのような理論上の問題であったのだろうか。この点について示唆を与えてくれる資料は、かれがちょうど第3版のための価値論の章の初稿をほぼ書きあげたと思われる時点の20年10月9日にマルサスにあてて書いた手紙であって、そのなかにつきのような章句が記されていた。

「もし私の商品が大兄の商品と同じ価値をもつとすれば、その生産費は同じであるにちがいありません。しかし生産費は、いくらか偏差はあるけれども、投下された労働に比例しています。……しかしこの〔商品価値は投下労働量に比例するという〕学説は、比較される商品の絶対価値全体を測定するためにではなく、時折生ずる相対価値の変動を測定するために用いられる場合には、反対を受けることがいっそう少なくなります。これらの変動は……ふたつの原因に、しかもただふたつの原因だけに帰着させることができます。ひとつはわずかな影響しか及ぼさないもので——賃金の騰貴ないし下落、あるいは同じことだと思いますが、利潤の下落ないし騰貴です。——もうひとつはきわめて重要な影響を及ぼすもので、商品の生産に必要な労働量の増減

(1) *Works*, VII, pp. 229—30.

(2)
です。」

ここで注目すべき点は、リカード自身が第3版の価値論の章のなかでは投下労働量による価値規定を諸商品の絶対価値を測定するためには用いないで、ただ相対価値の変動を測定するために用いるだけに止めたという趣旨のことを記している点である。そして、このような処理をすれば、投下労働量による価値規定に立脚する理論展開が論難と反対とに曝されずにすむだろうという趣旨のことをかれが付言していたことも見逃されてはならないだろう。それなら、リカードのこれらの発言にはどのような意味が含まれているだろうか。われわれはその点について考えるために、第3版の価値論の章の後半部分の記述内容を想起することにしよう。

かれは価値論の章の後半で、隔たった時点における商品の相対価値の変動をひき起す原因について考察しつつ、つぎのような所見を述べていた。——商品の相対価値の変動をひき起す原因はふたつある。ひとつはある単一もしくは複数の種類の商品の生産に投下される労働量の増減であるが、もうひとつは賃金の騰落による利潤率の変動である。利潤率の変動によってなぜ相対価値の変動が生ずるかといえば、それは諸商品がさまざまな固定・流動資本の組合せをもつ資本によって生産されていたり、異なる回収時間を要する資本によって生産されているため、利潤率の変動によってそれぞれの価値に異なる大きさの影響を受けるからである。しかし、これらふたつの原因のうち、相対価値の変動に対してはるかに重大な影響を及ぼすものは前者であって、後者の作用は「比較的軽微」である。——

かれは以上のような考察にもとづいて、諸商品の相対価値の変動をひき起す基本的な要因を商品の生産に投下される労働量の増減に求めるべきだと主張したのであった。ところで、以上の要約文から分るように、第3版のリカードはこの問題の考察において各種商品の絶対価値の大きさとその変動と

(2) *Works*, VIII, p. 279. ただし、傍点は引用者の施したものだ。

についてはなにも言及していなかった。相対価値が変動したのであれば、そのさいにいったいどの商品の絶対価値がどれほど上昇もしくは下落したのか、またどの商品の絶対価値が不変を維持したのか。こういう点はどのようにすれば明らかにすることができるのだろうか。ところが、当然問われるべきこういう問題について第3版のリカードウは全く論及しなかった。かれが20年10月のマルサスあての手紙のなかで、第3版では絶対価値の測定のためにではなく相対価値の変動の測定だけのために投下労働量による価値規定を適用するに止めたという趣旨を記したのは、この間の事情をリカードウ自身が明確に自覚していたことを示すものである。

それなら、第3版の当時かれはなぜ絶対価値の測定という試みを行わなかったのだろうか。私見によれば、その理由はつぎの点にあるように思われる。別稿で詳論したところだが、リカードウが『原理』第1・2版の価値論をみずから改訂する必要に迫られたのはマルサスの批判に触発されたためだと思われるが、改訂された第3版の価値論の章のなかでは、かれは諸商品の生産に使用される資本の回収時間に差異がある場合には、同一量の労働が投下された諸商品であっても、その価値はけっして同一ではないという新見解を提示した。⁽³⁾つまり、第3版ではかれは、諸商品の相対価値を変動せしめる原因がなにかを明らかにすることとは別に、そもそも諸商品の相対価値が、必ずしもそれらの生産に投下された相対的労働量に比例していないという点に気づいていたのである。かくして、第3版のリカードウは各種商品の絶対価値が必ずしもその生産に投下された労働量のみによって規制されているのではないという点を認めた。その結果、それなら各種商品の絶対価値はいかにすれば正確に測定されるのか、という問題がかれ自身によって新たに提起されることになったのである。

(3) 拙稿「リカードウにおける価値と自然価格との乖離」(Ⅰ)・(Ⅱ)(岡山大『経済学会雑誌』11巻4号・12巻1号所収)参照。

しかし、かれは第3版のための改訂作業に携わっていた時期には、「絶対価値の標準尺度」をどのような商品に求めるべきか、というみずから提起した問題に対して満足しうる解答を見出しえなかった。そこで、当時のかれはこの論点の解明を将来の課題として留保しておいて、第3版における価値論の改訂をみずから限定した枠のなかではかるにとどめようとしたのであったように思われる。この間の事情の一端を示してくれる興味深い資料は、第3版の価値論の章の改訂稿がちょうど印刷工程に入っていた時期にあたる21年1月25日にかれがマカァロクにあてて書いた手紙のなかのつぎのような一文である。

「学兄に度たびお話ししてきましたように、私は価値についてこれまで私と与えてきた説明に満足してはいないのです。なぜかという、私には私の標準尺度をどこから選び出すべきかということが正確には分らないからです。私は商品に実現された労働量をその相対価値を支配する基準として選ぶことが正しい方法だと十分に確信しているのですが、しかし絶対価値の標準尺度を選び出そうとすると、果して一年間の労働、それともひと月にわたる労働、一週間の労働、一日の労働のうちのいずれを選ぶべきかという点で、私は決断しかねているのです。」⁽⁴⁾

これで分るように、当時のかれは「商品に実現された労働量をその相対価値を支配する基準」とみなす見解の妥当性については揺ぎない確信をもちつづけており、したがって『原理』の「主要論題」たる蓄積と分配の理論の全体系が投下労働量による価値規定の基礎のうえに構築されるべきだという年来の考え方を変更する必要を少しも感じていなかったけれども、「絶対価値の標準尺度」の選定に関しては、未解決な論点を残しているため意見の陳述を留保せざるをえないという趣旨を語っていたのである。

こうして「絶対価値の尺度」を探索することがかれにとって残された研究

(4) *Works*, VII, p. 344. ただし、傍点は引用者の施したもの。

課題として第3版刊行以後にもち越されることになった。しかも、こうして設定された課題へむけてのかれの前進はその後必ずしも急速かつ順調な進展を示さなかった。われわれは21年2月から23年3月までにリカードウが書き残した文書のなかには、この論点をめぐってかれの研究の新たな進展を示すような論述をほとんど見出すことができない。しかし、かれは「絶対価値の尺度」の探索を全く断念したのではなかった。かれにとってその生涯の最後の年となった23年の春から秋へかけて、かれは精力的に研究を再開した。かれは23年4月初めに刊行されたマルサスの小著作『価値尺度論』に触発され、通読後直ちにマルサスに対して論戦を挑み、リカードウの死が訪れるまで両者の間には文通によって論争が展開された。だが、リカードウはマルサスとの論争と並行して、5月ないし6月頃からマカァロクとの間で、投下労働量による価値規定および価値尺度の理解の仕方をめぐって、口頭および文通⁽⁵⁾によって論争を行った。

リカードウはこれらの論争に携わりながら年来の課題である「絶対価値の尺度」の選定という問題を考えつづけていた。しかし、かれはマルサスの価値尺度論やマカァロクの価値理論に対しては、最初から確信に満ちた態度で鋭くかつ厳しい批判を加えたけれども、かれ自身の価値尺度の選定に関する積極的見解を記述するという点になると、23年7月下旬になってもまだ躊躇していた。かれは7月24日づけのトラワアて手紙のなかでつぎのように述べていた。「マルサスはある商品の価値の上昇もしくは下落を語る時、それをかれ自身の推奨する特殊な価値尺度で評価しているのです。……私自身はといえば、私もまた〔マルサスやマカァロクその他の論者に伍して〕この〔価値尺度の選定という〕問題について思索をめぐらすつもりです。しかし私は、

(5) 1823年におけるリカードウとマルサス・マカァロクとの論争についての詳細は、拙稿「晩年のリカードウと価値尺度論争」（岡山大『経済学会雑誌』12巻2号所収）を参照されたい。

私がすでに公表したあのみずから不完全なものと自認したもの以上に妥当な結論には到達できないのではないかと思います。⁽⁶⁾と。

8月に入っても、なおかれは研究の前途に明るい見通しをもつことができなかった。かれは論敵のマルサスに対してさえ、かれが失意のなかにあることを隠そうとしなかった。かれは8月3日づけのマルサスあて手紙のなかでこう書いている。「これまで私がしてきたことは、異論の余地のない価値尺度⁽⁷⁾を発見することが極度の難事であることを痛感するということだけでした。」と。そして、かれは8月8日づけのマカァロクあて手紙のなかでもつぎのように書いた。「私は困難な価値の問題について思索をめぐらしてきましたが、迷路からの出口を満足に見出せないでいます。⁽⁸⁾」と。

それにもかかわらず、かれはこの8月上旬に価値尺度の選定問題に関していくらかためらいながらもある決断を下したように思われる。かれは8月7日づけのミルあての手紙のなかでつぎのように書いた。「なんらかの正確な価値の尺度を発見するうえで真の困難がなんであるのかを明らかにすることは、経済学への真の貢献になるでしょう。われわれは結局は、正確な価値の尺度の近似物に到達できるにすぎません。また、それ自身変動を蒙むことの最も少ないものが最善の尺度であるにちがいありません。われわれは最善のものに行き着いているのだと思います。しかし、それが最善のものだということを証明するためには、もう少しなんらかのことが言われなければなりません。私がこの仕事をやり遂げることができたらよいのですが。しかし、私は私よりももっと有能な筆者にこの仕事を引受けてもらわなければならないでしょう。⁽⁹⁾」

リカードウが価値尺度の選定問題についてこれまで思索をめぐらしてきた

(6) *Works*, IX, pp. 312—3.

(7) *Works*, IX, p. 325.

(8) *Works*, IX, p. 330.

(9) *Works*, IX, p. 329.

ところをとにかくもとまりまとめるための論説を執筆しようと思いついたのは、おそらく上のミルあて手紙を書く前後の頃であったとみてよいだろう。こうしてかれは8月上旬からこの論説の執筆に着手して9月5日まで執筆を継続したが、この日発病したため執筆を中断したが、病状の悪化がかれにペンを再び握らさなかった。かれが死去したのは9月11日であり、この論説は未完の遺稿となった。

かれはこの論説にみずから「絶対価値と交換価値」という表題を記して、ふた組の草稿と覚え書の紙片2枚とを書き残した。スラッファの考証によれば、ひと組の草稿は18枚の形の不揃いな半端な紙片に書かれており、用紙のなかにはかれが受信した手紙の封筒のような紙片も含まれている。用紙が半端であることからみても、またこの草稿の叙述のすすめ方が起承転結の整ったものとはいえないという点からみても、このひと組の草稿は明らかにリカードウが論文作成の準備作業として執筆した第一次草稿であったとみなすことができるだろう。なお、スラッファはこの草稿について、用紙として利用された封筒の日付けその他の点からみて、この草稿がおそらく8月下旬までに書きあげられたものと推定している⁽¹⁰⁾。われわれは本稿では、行論の便宜上からこの草稿を「第一草稿」と呼ぶことにする。

さて、この論説のもうひと組の草稿は、「なんの訂正もなしに7枚の同形の紙片に書かれて」おり、そのうえ叙述のすすめ方も理路整然としている。そして、この草稿の叙述のなかには、8月末にリカードウが受信したマルサスやマカァロクの手紙のなかの章句や同じ8月末にリカードウがマルサスあての手紙のなかを書いたのと同じ文章が見出されることからみて、この草稿の執筆時期は8月末以降であると推定することができる⁽¹¹⁾。これらの特徴からいって、これは明らかに「改訂稿」として書かれたものといえるだろう。われ

(10) Cf. P. Sraffa, Note on Absolute Value and Exchangeable Value, *Works*, IV, p. 359.

(11) Cf. *ibid.*, pp. 359—60.

われはこれを「第二草稿」と呼ぶことにしたい。

われわれは本稿でリカードウの遺稿「絶対価値と交換価値」について考察したいと思っているが、この論説のふた組の草稿⁽¹²⁾について上記したところを考慮すれば、われわれの作業にとっては当然リカードウ自身による推敲の度合の高い「第二草稿」のほうがいっそう利用価値が高いものといえるだろう。しかし、それだからといって、われわれにはわれわれの作業を「第二草稿」を利用するだけですませるわけにはいかない事情がある。というのは、リカードウの発病がこの論説の完成にとってはあまりに早過ぎたため、「第二草稿」は論述の半ばで途切れており、叙述の分量を比較すると、「第二草稿」は「第一草稿」の半分以下であって、当然「第二草稿」は「第一草稿」の論述内容のすべての論点を含んではいないように思われるからである。

こうした事情を考慮すれば、リカードウの遺稿について考察しようとする者は、なによりもまず二種の草稿を丹念に比較・検討する必要があるだろう。そして、二種の草稿の双方に共通して記述されている論点の理解については主として「第二草稿」を利用して行うということで差支えないだろうが、「第二草稿」に記述されていない論点について知るために「第一草稿」の検討を怠ってはならないであろう。大ざっぱに言えば、「第二草稿」は「第一草稿」の前半部分の叙述を整理し直したものといえるように思われる。そこで、われわれは本稿の第二節では「第二草稿」の内容について考察することにし、そのさい必要に応じて「第一草稿」の前半部分の叙述をもあわせて参照する

(12) リカードウの遺稿について考察した先駆的業績として、玉野井芳郎「リカードウ価値論再考」(東大『経済学論集』34巻1号, 1968.), 桜井毅「不変の価値尺度論の限界」(東大『経済学論集』34巻1号, 1968.)がある。それ以後、この遺稿に言及したものとして、千賀重義「リカードウ不変な価値尺度論の再認識」(名古屋大『経済科学』18巻4号, 1971.), 中村広治「Ricardo 研究」(『経済学史学会年報』10号, 1972.), 平林千牧「リカードウの労働価値論」(法政大『経済志林』46巻2・3号, 1978.), 小黒佐和子「リカードウの不変の価値尺度についての一考察」(明治学院『経済研究』55号, 1980.)

ことにしたい。そして、本稿の第三節では、「第一草稿」の後半部分について考察することにしよう。

2. 遺稿の「第二草稿」について

リカードウはこの論説の「第二草稿」をつぎのような問題提起から書き出している。

——商品の交換価値とは、当該商品が市場で支配できる他の商品の分量である。だが、諸商品の交換価値は隔たった時点では変動することがある。その場合、もしそれらのなかに「それ自身の価値が増減するおそれのない」商品が存在するとすれば、われわれはそれを価値尺度に選ぶことによって、他の諸商品の価値の相対的変動の大きさだけでなく、それらの価値の「実質的変動」の大きさをも正確に測定することができるだろう。こういうわけで、かりに「それ自身の価値が増減するおそれのない」商品をわれわれが見つめることができるとすれば、われわれはこれを「完全な価値尺度」とみなすことができるだろう。こういう尺度さえ入手できれば、われわれは諸商品の相対価値の変動についてだけでなく、その絶対価値の変動についても正確に測定することができる。ところが、現実においては「それ自身の価値が増減するおそれのない」ような商品は存在しない。というのは、どんな商品もその生産に投下される労働量がつねに不変であるというわけではないからである。こういうわけで、われわれは「完全な価値尺度」を現実の世界のなかで見つけることができない。「完全な尺度」の入手難という点については、従来は以上のようなことが述べられてきたにすぎない。しかしそれなら、かりにその生産に投下される労働量が不変であるような商品が存在しているとすれば、われわれはこれを直ちに「完全な尺度」として選ぶことができるのだろうか。⁽¹³⁾ ——

(13) Cf. *Works*, IV, pp. 398—402.

さて、リカードは上述の所論の最後のところで通説に対してみずから提出した疑問に答えて、つぎのような所見を述べる。

——かりにその生産に投下される労働量が不変であるような商品が存在しているとしても、この商品もけっして「完全な尺度」としての資格を備えてはいない。なぜなら、現存する諸商品はさまざまに異なる回収時間を要する資本の使用によって生産されているため、どの商品を尺度に選んでも、この尺度財の生産の場合と異なる回収時間を要する資本の使用によって生産される他の諸商品の価値を正確には測定しえないからである。例えばここで、ある分量の小えびの捕獲には10人がそれぞれ1日だけ労働する必要がある、また、ある分量の毛織物の生産には10人の労働を一年間使用する必要がある、そして、ある分量のぶどう酒の醸造には10人の労働を二年間使用する必要があると仮定してみよう。こう仮定した場合、われわれは果して毛織物の価値は小えびの365倍であり、ぶどう酒の価値は毛織物の2倍であるといつてよいのだろうか。⁽¹⁴⁾——

リカードはこれら三種類の商品の相対価値がそれらの生産に投下された相対的労働量に正確には比例しないと主張して、つぎのように述べた。

「まず第一に、仮定された諸条件のもとで生産された毛織物が正確に小えびの価値の365倍であろうというのは、真実ではない。なぜなら、これだけの価値に加えて、利潤10パーセントの場合には、毛織物が市場にもち出されるまでに前払がなされた期間について、この前払全額に対する10パーセントが加算されなければならないからである。また、ぶどう酒がわずかに毛織物の価値の2倍にすぎないというのも真実ではない。……第二に、もし利潤が10から5パーセントに低下するなら、ぶどう酒と毛織物と小えびとの価値の間の比率はそれに応じて変動するだろう。たとえこれら商品のそれぞれを生産するのに必要な労働量になんの変化も起らなかったとしても、この比率は変

(14) Cf. *Works*, IV, p. 402.

動するだろう。」⁽¹⁵⁾

リカードはここで投下労働量による価値規定を修正する要因について、異なるふたつの見地から考察している。まず、第一の見地からする考察は、回収期間を異にする資本を使用する異種産業部門の生産物の場合、その相対価値は正確にそれらの生産に要する相対的労働量に比例するわけではないという問題点を明確に摘出している。かれはこういう価値と労働量とのずれを生み出す要因が利潤であり、使用される資本の回収期間に差異がある場合には、各種商品の価値のなかに占める利潤の割合が回収期間の差異に応じて異なるため、等量の労働の投下された諸商品の価値が相互に不等にならざるをえなくなると指摘している。こういうリカードの所見は事実上において、投下労働量によって規定されるものとしての価値と平均利潤によって規定されるものとしての自然価格との乖離を認めるものといわなければならない。しかし、かれがこの乖離を認めるのはあくまでも事実上のことであって、かれは価値と自然価格との範疇的区別に到達しているのではけっしてない。この場合、かれはただ、使用される資本の回収時間に差異のある異種産業部門間については、商品価値は投下労働量に比例するという命題そのものにいくらかの「修正」を施す必要があると考えているにすぎないのである。

ところで、リカードはさきほどの引用文のなかで、もうひとつ別個の見地からも価値規定の修正要因について考察している。引用文中「第二に」で始まる文章はその点についての論述である。かれの見解によると、使用される資本の回収時間に差異のある異種産業部門間では、たとえあらゆる種類の商品の生産に投下される労働量が不変を維持したとしても、利潤率が変動すれば、それによって諸商品の相対価値はいくらか変動せざるをえないという

(15) *Works*, IV, pp. 402—3.

⁽¹⁶⁾
のである。

別稿で詳論したところだが、リカードウが上記のふたつの見地から価値規定の修正要因を明らかにしたのは、『原理』の第3版においてであった。しかし、第3版でも叙述の前面に現れていたのは、第二の見地からする価値規定修正論だったのであり、第一の見地からする修正論は第3版ではただ叙述の行きずりに言及されていたにすぎなかった。⁽¹⁷⁾この遺稿からのさきほどの引用文は、第3版と比較してみると、ふたつの見地からする修正論の内容上の差異がリカードウによっていっそう明確に捉えられていたことを示している。この点だけでも、この遺稿はリカードウがかれの価値論研究の水準を第3版よりも一段高めることを意図して執筆した論説であったといえるだろう。

ところで、われわれは「第二草稿」の上の引用文につづく叙述を見ることにしよう。リカードウはひきつづき第二の見地からする修正論を詳述している。——利潤率の変動が諸商品の価値を変動せしめるのだとすれば、それはそれぞれの商品の価値をどのように変動せしめるだろうか。だが、われわれはこの場合の商品価値の変動が、われわれが価値尺度としてどのような商品を選ぶかによって異なる現れ方をすることに注意しなければならない。すなわち、もし毛織物の生産に要するのと同じの時間で生産される財貨のなかから価値尺度が選ばれたのであれば、利潤率の低下は小えびの価値を上昇せしめるのに反してぶどう酒の価値を下落せしめるが、毛織物の価値を変動させることはないだろう。だが、もしぶどう酒の醸造に要するのと同じの時間で生産される財貨のなかから価値尺度が選ばれたのであれば、利潤率の低下は毛織物の価値をいくらか上昇させ、小えびを著しく上昇させるが、ぶどう酒

(16) ただし、リカードウがかれの議論のなかで「利潤率の変動」について語る場合、それはつねに賃金率の騰落によってひき起されるものと考えている。かれは主張する。「完成品のなかの労働者に支払われる割合の増減……これが利潤の変動の唯一の原因である。」

(Works, IV, p. 404. ただし、傍点は引用者の施したもの。)

(17) 前掲拙稿「価値と自然価格との乖離」参照。

を変動させることはないだろう。また、もし小えびの捕獲に要するのと同じの時間で生産される財貨のなかから尺度が選ばれたのであれば、利潤率の低下は毛織物をいくらか下落させ、ぶどう酒を著しく下落させるだろうが、小えびを変動させることはないだろう。⁽¹⁸⁾——

つづいてリカードは利潤率の変動によって諸商品の相対価値が変動する理由について、つぎのように説明している。

「諸商品が市場にもち出される時間に関する限り、諸商品はきわめて多様な事情の下で生産されているのだから、それらはただその生産に必要な労働量の増減のために変動するばかりでなく、完成品のなかの労働者に支払われる割合の増減のせいで変動することもあるだろう。この割合は労働が豊富であるか稀少であるかに応じて変動し、また労働者の必需品の生産がいつそう困難になるに応じて変動するのであって、これが利潤の変動の唯一の原因である。労働だけで一日で生産される商品は利潤の変動によっては全く影響を受けないし、一年で生産される商品が利潤の変動によって受ける影響は、二年で生産される商品の場合よりも小さい。」⁽¹⁹⁾

リカードの意見はこうである。諸商品は異なる回収期間を要する資本によって生産されているから、各種商品の価値のなかに占める賃金と利潤との割合は異ならざるをえない。そこで、短時間で回収される資本によって生産される商品の場合にはその価値のなかに占める利潤の割合は比較的小さいが、回収に長時間を要する資本によって生産される商品の場合にはその価値のなかに占める利潤の割合は比較的大きい。そのため、利潤率の変動は前者の商品よりも後者の商品の価値に対していつそう大きな影響を及ぼすというので

(18) Cf. *Works*, IV, p. 403.

(19) *Works*, IV, p. 404.

⁽²⁰⁾
ある。

そうだとすると、隔たった時点で諸商品の相対価値が変動したという場合、この期間にどの商品の絶対価値が不変であり、どの商品の価値がどれだけ騰貴ないし下落したのかということを正確に測定するための「完全な価値尺度」を見出すのは極度に困難だということになるだろう。リカードウは「第一草稿」のなかで、この点をつぎのように指摘している。「そうだとすると、われわれがあらゆる商品に適用できる価値尺度を見出そうとするさいに悩まされる困難は、現実には商品がさまざまな条件の下で生産されているということから生ずる。」⁽²¹⁾と。

こういうわけで「完全な尺度」を発見することは極度に困難だというのが、リカードウの見解であるが、しかしかれとしては、それだからといって「完全な尺度」の探索を断念してしまうわけにはいかない。それはかれが隔たった時点において諸商品の相対価値が変動した場合、この相対価値の変動をひき起した原因がなんであるかが明らかにされなければならないと考えたからである。すでに知ったように、相対価値の変動はある単一もしくは複数の種類の商品の絶対価値が変動することによって起るということもあるし、またどの商品の生産に要する労働量も不変であっても賃金の騰落による利潤率の変動が生じさえすれば、それによっても相対価値は変動するのである。そこで、リカードウとしては相対価値の変動に関する個々のケースについて、そ

(20) リカードウは「第一草稿」のなかでも、小えびと毛織物とぶどう酒とを例にとりながら、つぎのように述べている。「労働が騰貴するのに比例して、一定量の小えびは〔以前よりも〕いっそう多量の毛織物と交換されるだろう。なぜなら、(小えびの全価値が労働者の報酬になり、労働者がそのなかから資本ないし前払に対する利潤のために控除する必要がないのに対して) 毛織物の全価値は労働の報酬とはならないで、その一部分が前払をなした雇主の利潤となるからである。また、同じ理由で、毛織物は〔以前よりも〕いっそう多量のぶどう酒と交換されるだろう。なぜなら、ぶどう酒の価値のなかのさらにいっそう大きな部分は前払に対する利潤から成り、労働の賃金はいっそう小さな部分から成るからである。」(*Works*, IV, p. 370.)

(21) *Works*, IV, p. 368.

れが果してどちらの原因にもとづいてひき起されたものであるのかを明らかにしなければならず、それにはどうしてもあらゆる種類の商品の絶対価値を正確に測定することのできる尺度が見出されなければならないというわけである。だから、かれはこの遺稿を執筆したのと同じ時期に書いた紙片のなかで、つぎのように述べたのであった。⁽²²⁾「諸商品の交換価値が変化した時に、いったいどの商品に価値の変動が起ったのかを知ることが可能にするような絶対価値の尺度を手に入れることが経済学におけるきわめて切実な要求である⁽²³⁾ということは、疑う余地のないことである。」

だが、すでに知ったように、各種商品はさまざまに異なる回収時間を要する資本の使用によって生産されている以上、どの商品を尺度に選んでも、他の種類の商品の絶対価値を正確に測定することはできない。そこで、リカードは「完全な尺度」の近似物の選定を提唱しつつ、「第二草稿」のなかで、つぎのように述べるのである。

「私には、ある一定の期間にわたって使用された労働によって生産され、つねにある資本の前払を想定しているものを尺度に選ぶべきだということは、きわめて明瞭であるように思われる。なぜなら、第一に、それは時間についてその尺度自身と同じ事情の下で生産された商品すべてに対して完全な尺度であるからであり、第二に、交換の対象となる商品のうちのずばぬけて多数のものは、資本と労働との結合によって、換言すればある一定の期間にわたって使用される労働によって生産されているからである。第三に、一年間使用された労働によって生産される商品は、一方で一年よりもはるかに長期にわたる労働と前払とによって生産される商品と他方で少しも前払を用いずに一日だけ使用される労働によって生産される商品との両極端の中間であり、

(22) このリカードウが書き残した紙片のことについては、cf. Sraffa, op. cit., *Works*, IV, p. 360.

(23) *Works*, IV, p. 399 footnote.

そこでこの中位のものは、大抵の場合に両極端のどちらかが尺度として使用される場合よりも真理から離れることがはるかに少ないだろうからである。われわれは貨幣を穀物の生産に要する時間と同じ時間で生産されるものと仮定しよう。……この尺度は日常の消費財のなかできわだって貴重な物品となっている穀物やその他の大抵の植物性食物と同じ時間で生産⁽²⁴⁾されているという事情にもとづいて、私はこれを尺度に選ぶことを決意する。」

リカードウによれば、社会で交換される商品のうち「ずばぬけて多数」のものは資本と労働との結合によって生産されるのであって、ただ一日分の労働を扶養する資財のほかには少しも資本を使用せずに労働のみによって生産される財貨、例えば小えびのようなものは例外的存在でしかない。そこで、価値尺度を選定する場合には、それは資本と労働との結合によって生産される財貨のなかから選ぶのが妥当だということになる。しかし、こういう財貨の生産に使用される資本の回収期間はさまざまに異なっており、したがっていかなる回収期間を要する資本によって生産される財貨のなかから尺度を選んだらよいかが尺度選定のさいの困難な問題になるというのである。

だが、リカードウは回収に一年を要する資本を用いて生産される財貨のなかから尺度を選ぶべきだと主張する。かれの考えでは、このように貨幣商品の生産に投下される資本の回収期間が一年であると仮定すれば、日常消費財のなかで最も重要な地位を占める穀物その他の農産物の多くのものの価格は、投下労働量の増減によってのみ騰落し、賃金や利潤の変動によっては少しも価格変動を蒙らないものとして示されるだろう。そして、回収に一年を要する資本を用いて生産される商品というのは、一方における小えびのように一日の労働で生産される商品と他方におけるぶどう酒のように回収に長時間を要する資本を用いて生産される商品との両極端の「中位」にあるものとみなすことができる。そこで、われわれがこの「中位」のものを貨幣として選

(24) *Works*, IV, pp. 405—6. ただし、傍点は引用者の施したもの。

べば、両極端のどちらを選んだ場合よりも「真理から離れることがはるかに少ない」と考えてよいだろう、トリカードウは主張するのである。

ここでリカードウは「中位」のものを尺度に選ぶ理由をどのように考えていたのだろうか。かれはおそらく、貨幣商品の生産のために要する資本の回収時間が「中位」であると仮定すれば、賃金の騰落による利潤率の変動が諸商品の価格に及ぼす影響は最も小さくてすむだろうし、さらに社会の総生産物の価格総額についてみれば、一部商品の価格騰貴と別の商品の価格下落とが相殺されて全体としては不変を維持するからだと考えているのであろう。かれ自身「第一草稿」のなかでは、つぎのように記していた。「中位のものを〔尺度として〕選べば、両極端の一方を選んだ場合よりも、賃金の騰落のために生ずる商品〔価格〕の変動がはるかに小さくなることは明らかである。⁽²⁵⁾」

さて、以上のように議論をすすめてきたリカードウは、ついでマルサスの価値尺度論に対して批判的検討を加え、さらにマカァロクの価値理論に対する批判的検討に着手するが、「第二草稿」はこのマカァロク批判の論述の半ばで途切れている。なお、かれの遺稿のなかのマルサスおよびマカァロクに対する批判的立論は、1823年4月から8月までの間にかれらとの間にとりかわされた私信のなかに記述されたかれの所論の要約にすぎない。当時リカードウとかれらとの間に文通で行われた論争については、私は別稿で詳述したから、遺稿のなかの上記した論点については本稿で重ねて論及する必要はないだろう。⁽²⁶⁾

われわれは本節を結ぶにあたって、以上に考察してきた「第二草稿」の主要内容についてもう一度ふり返って、つぎの点を指摘しておきたいと思う。かれは遺稿のなかで、投下労働量による価値規定に「修正」を施す必要を生ぜしめる事情を異なるふたつの見地からとりあげていた。すなわち、「第一の

(25) *Works*, IV, p. 373.

(26) 前掲拙稿「晩年のリカードウと価値尺度論争」参照。

見地」からの考察は資本の回収時間に差異があるということそれ自体が投下労働量による価値規定に対して「修正」を迫るという点を明らかにしていたし、「第二の見地」からの考察は賃金の騰落による利潤率の変動が回収時間に差異のある資本によって生産された諸商品の相対価値を変動せしめ、したがってその点でも投下労働量による価値規定には「修正」を施す必要があるという点を明らかにしていた。

以上の点を明らかにした後、「第二草稿」の叙述は「不変の価値尺度」の選定に関する考察へとすすんでいったのだが、この点についての「第二草稿」の叙述はもっぱら「第二の見地」からする価値規定修正論とかかわらせて展開されたものであった。そして、「第二草稿」はその点の論述の末尾のところで途切れているために、リカードウが遺稿のなかでも相変わらずかれの価値規定修正論を「第二の見地」から考察することに主要な関心を寄せつづけていたような印象を読者に与えている。

この点に関連して、リカードウの価値規定修正論の特徴をつぎのように指摘したスラッフアの所見は興味深い。「『原理』の」第3版では、リカードウは時折は、〔商品の〕相対価値に差異を生ぜしめるものとして資本の割合や耐久度の差異に言及しているけれども、賃金の上昇が〔商品の相対価値に変動をひきおこすような〕影響を及ぼすという点が依然として前面にとどまっていた。そして、『絶対価値と交換価値』を論ずる論文のなかでも注意が集中²⁷⁾されていたのは、この局面であった。」

われわれとしてはすでに知ったとおり、「第二草稿」についていう限り、その論述の大半部分が「第二の見地」からする価値規定修正論から成っていたのだから、スラッフアの指摘は誤ってはいない。しかし、本稿第一節の末尾に記しておいたように、「第一草稿」はその後半部分において、「第二草稿」

(27) Sraffa, *Introduction to the Works of Ricardo*, I, p. xlviii. ただし、傍点は引用者の施したもの。

では全く論及されなかった論点についての記述を含んでいる。だから、われわれはリカードウの遺稿を全体として考察し、その内容全体についてなんらかの評価を与えようとするなら、「第一草稿」のみに記述されたかれの所論の内容についても検討しておく必要があるだろう。

3. 「第一草稿」の後半部分について

「第一草稿」の後半部分は全体が12の項目に分類されて記述されている。⁽²⁸⁾しかし、第1項から第10項のあたりまでは、「第一草稿」の前半部分の叙述の要約以上の内容を含んでおらず、したがってわれわれがすでに知った「第二草稿」の内容と実質的に合致するところが多いから、われわれとしてはこれらの項目については特に言及する必要はないだろう。ただし、第10項の内容は第11項以下の論述に直接かわりをもつものであるように思われるから、われわれは第10項から考察をはじめことにしよう。

リカードウは第10項の冒頭で、つぎのような命題を掲げる。「このような〔その生産にはつねに同一量の労働が投下されている財貨のなかから選ばれた〕尺度は、もしあらゆる商品の生産に必要な時間が正確に同一であって、時間の長さにちがいがないとすれば、これまで主張されてきた長所のすべてをもっているだろう。その場合には、諸商品の絶対価値はそれらに投下される労働量に直接比例するだろう。」⁽²⁹⁾

リカードウによれば、全商品の生産に投下される資本の回収時間が同一だとすれば、完全な価値尺度にとって必要な条件は、尺度として選ばれる商品がつねに同一量の労働の所産でなければならぬということだけである。この場合には、こういう尺度で測った諸商品の価値（＝絶対価値）は正確にそれ

(28) ただし、第6項は重複番号となっているから、全体は実質的には13の項目から成っているといわなければならない。

(29) *Works*, IV, p. 382.

らの生産に投下された労働量に比例するはずだというのである。

ところが——とリカードウはつづける——実際にはさまざまな商品は異なる回収時間を要する資本によって生産されている。そのために、諸商品の相対価値はけっしてそれらの生産に投下された相対的労働量に正確に比例してはいないのである。「一年間に100人の労働を必要とする商品は、半年間に100人の労働を必要とする商品の価値の正確に二倍であるわけではない。二年間に100人の労働を必要とする商品は、一年間に同一量の労働を必要とする商品の³⁰⁾価値の正確に二倍であるわけではない。」

このように各種商品の生産に使用される資本の回収時間がさまざまに異なる場合には、そのなかからどの商品を価値尺度に選んでも、それを用いて別の種類の商品の価値を正確に測定することはできないだろう。そこで、リカードウはいう。「どんな価値尺度も異なった時間的条件の下で生産される諸商品の相対的変動を確定するための普遍的に正確な尺度にはなりえない。」と。³¹⁾

さて、「第一草稿」の第11項に移ることにしよう。リカードウはこの項では、前項で記述した論点について、新たに数字例を掲げていっそう平明に叙述しようと試みる。——商品Bの生産には二年を要するが、第一年度には100ポンドで雇用された労働者が労働に従事し、第二年度にも100ポンドで雇用された労働者が労働するものとする。いま利潤率が10パーセントとすれば、完成して市場にもち出される商品Bの価値は231ポンドであろう。これに対して、商品Aの生産には一年しか必要ではないが、それは200ポンドで雇用された労働者によって生産されるものとする。同じ利潤率の場合、商品Aの価値は220ポンドであろう。してみると、商品AとBとは、その生産に同一量の労働が投下されているにもかかわらず、価値において等しくはないということになる。そこで、リカードウはいう。「それゆえ、その価値はそれに投下された現実の

(30) *Works*, IV, p. 382.

(31) *Works*, IV, p. 383.

労働量によって規制されているわけではない。」⁽³²⁾と。

つぎに、かれはぶどう酒のようなその生産に使用される資本の回収に長時間を要する商品Cの場合について考察する。——商品Cは第一年度に200ポンドで雇用された労働者によって生産されるが、それは期末に直ちに市場にもち出すことはできず、それから一年間地下室に貯蔵されなければならないものとする。利潤率が10パーセントであれば、商品Cが市場にもち出された時には、242ポンドの価値であろう。——

してみれば、これら三種類の商品はいずれも同一量の労働の所産であるにもかかわらず、それぞれの価値は異なっており、Aは220、Bは231、Cは242ポンドである。リカードウは第11項で以上のように説いた。

さて、「第一草稿」の後半部分の中心論点は第12項のなかで記述されている。リカードウはこの項の冒頭で、前記第11項で例示した各種商品の価値が賃金の騰貴による利潤率の低下によって変動するという点に読者の注意を喚起している。利潤が10から5パーセントに低下する場合を仮定すると、「もしこれらのうちの第一の商品〔A〕が価値尺度だとすれば、この商品それ自体が変化することはありえないのであり、したがってそれは依然として220ポンドの価値をもつだろう。この場合には第二の商品〔B〕は225.5ポンド、第三の商品〔C〕は231ポンドになるだろう。そこで第一の商品で測れば、第二の商品は2.38パーセント、第三の商品は4.54パーセント下落したことになるだろう。」⁽³³⁾

ここでリカードウが価値尺度として選んだものは商品Aであるが、これはその回収に一年を要するものと想定された資本の使用によって生産される商品である。ところが、かれの意見では、このような価値尺度も「完全な尺度」ではない。なぜなら、賃金騰貴による利潤率の低下が起れば、この尺度で測

(32) *Works*, IV, p. 384.

(33) *Works*, IV, p. 384.

った商品A・B・Cのそれぞれの価値は、たとえどの商品の生産事情にもならんらの変化も生じなかったとしても、必ずしも不変のままにとどまるわけではないからである。すなわち、利潤率の低下によって価値変動を蒙むらないのは商品Aだけであって、BおよびCの価値は低下せざるをえないし、しかもBとCとの価値低下の度合は異なっているというのである。

かくして、回収に一年を要する資本を使用して生産される商品も「完全な尺度」としての条件を充しているわけではない。それなら、これは「不完全な尺度」であり、「完全な尺度」はほかに求めなければならないのだろうか。しかし、リカードウはこの疑問に答えて、つぎのように述べている。「しかし、以上のことは提案されているこの尺度が不完全な尺度だということを立証するのだろうか。私は諸商品の価値を一年に一度ずつ評価することを主張してはならないのだろうか。——つまり、200ポンド〔の労働〕が投下されたぶどう酒は第一年度末には220ポンドの価値があり、その半分の労働が同一期間投下された他の商品はいずれも110ポンドの価値があると私は主張してはならないのだろうか。ここまでのところは、それらの価値は投下された労働量に一致している。そして、利潤が変動して20パーセントになろうと、あるいは5パーセントになろうと、それらの相対価値は正確に同一のままであろう。たとえ第二年度にこれらの資本のなかの第一のものを少しも労働を使用せずに投下するとしても、その商品の価値は、われわれが労働の維持に等しい価値を投下した場合と正確に同一であるにちがいない。したがって利潤が10パーセントであれば、〔第二年度末には〕それらの商品はどちらも242ポンドの価値をもつだろう。」⁽³⁴⁾

リカードウの意見はこうである。——200ポンドで一年間雇用された労働によって生産された商品の価値は、同一期間100ポンドで雇用された労働によって生産された商品の価値の二倍である。利潤率10パーセントの時、前者の商

(34) *Works*, IV, p. 385. ただし、傍点は引用者の施したもの。

品は220ポンドであり、後者の商品は110ポンドになるが、双方の商品の相対価値はもっぱらその生産に投下された労働量のみによって規制されたものであり、したがって利潤率のいかなる変動も1：2という双方の商品の相対価値を変動させることはない。ところで、ぶどう酒が生産されて市場にもち出されるには、一年間にわたって若干の労働が使用される必要があるほか、ぶどうから搾りとられた液体が若干の年数地下室に貯蔵されなければならない。かりに一年間の貯蔵の後に市場にもち出されるものとすれば、このぶどう酒はどれほどの価値になるだろうか。ぶどう酒の価値はつぎのような手続きによって計算すべきである。まず第一に、一年間にわたる200ポンドで雇用された労働者の労働によって醸造されたばかりで、これから地下室に貯蔵される時点におけるぶどう酒の価値は、その生産に投下された労働量に応じて220ポンドになると見積って差支えない。しかし、この220ポンドはこの時点で業者の手許に回収されるわけではなく、ぶどう酒がそれから一年の間地下室に貯蔵された後でなければ回収されえない。かくして、業者はぶどう酒の貯蔵のために220ポンドの資本を一年間支出することになる。ところで、もしここに別の製造業者があって、かれが220ポンドで一年間労働を雇用することによってある種の製造品をつくらせたとすれば、期末にかれの製造品が242ポンドの価値をもつことは明らかだろう。そうだとすると、ぶどう酒の場合も、業者は同じ220ポンドを一年間資本として投下しているのだから、たとえこの220ポンドが労働の雇用にあてられたのではなかったとしても、貯蔵後一年を経過したぶどう酒は242ポンドでなければならないであろう。――

リカードウの見解によれば、各種商品がさまざまに異なる回収時間を要する資本を使用して生産されている以上、価値尺度としてどの商品を選んでも、それは「完全な尺度」にはなりえない。この場合、リカードウにとってとりわけ説明困難と思われたものは、ぶどう酒とか樹木といったように、その生産に使用した資本の回収に多年を要する商品であって、これらの商品の生産のために現実に投下された労働量が比較的少量であるのに市場にもち出され

たこれらの商品はきわめて高価であるという点をどう説明したらよいかという問題であった。かれはこの難問を解決するために、労働の雇用のために使用された資本の回収に一年を要して生産される商品を価値尺度に選ぶことを提案したのであった。かれの意見では、資本の回収に多年を要して市場にもち出されるぶどう酒や樹木のような商品の価値は、かれの選んだ価値尺度によって一年に一度ずつ評価することによってその大きさをほぼ正確に測定できるはずだというのである。

このように考えて、リカードウは主張する。「もし価値尺度が一年で生産されるものであれば、測定されるべき商品は年ねん評価されなければならない。そこで、そういう商品はその商品に現実^に投下される労働量によって評価されてはならないのであり、かりにその商品の価値が尺度である商品の生産に〔資本として〕ふりむけられた場合に雇用することのできる〔労働の〕量⁽³⁵⁾によって評価されなければならないのである。」

リカードウの見解はこうである。一年間にわたる労働の所産としての商品の価値は、その生産に現実^に投下された労働量に依存して決定されていると考えることができる。しかし、その生産に使用される資本の回収に一年よりも長い期間を要する商品の価値は、その生産に現実^に投下された労働量によって評価されてはならない。いま、地下室に一年貯蔵された後に販売可能な商品となるぶどう酒を評価しようとするなら、市場にもち出されるぶどう酒の価値は地下室に貯蔵される直前にぶどう酒がもっているはずの価値で一年間雇用できるだけの労働量によって評価されなければならないというのである。ぶどう酒は貯蔵されている期間については、現実には少しも労働が投下されないけれども、しかしその期間ぶどう酒という形をとった資本価値が回収されないのだから、それだけの資本価値が雇用することのできるだけの労働量に應ずる価値を貯蔵後のぶどう酒はもつにちがいないというのである。

(35) *Works*, IV, pp. 385—6. ただし、傍点は引用者の施したもの。

こうしてその生産に使用される資本の回収に一年よりも長い年数を要する商品の価値は、回収期間一年の資本で生産されるリカードウの価値尺度によって一年に一度ずつ評価するという仕方では測定されなければならないというのである。そして、リカードウはこの点を、つぎのような説明の仕方でも示している。「評価される商品は、それを評価する商品の生産条件と（生産の時間⁽³⁶⁾に関して）正確に同一の条件に還元されなければならない。」と。

リカードウは以上述べてきたところをみずからつぎのようにとりまとめている。「これらの二商品〔回収に一年を要する資本によって生産される毛織物と回収に二年を要する資本によって醸造されるぶどう酒〕の価値がそれらに現実に投下された労働量に比例すると主張するのは、厳密に言えば正しくない。けれども、二年後のぶどう酒の価値は、第一年度にそれに現実に投下された労働と、かりにぶどう酒がその生産の第一年度末に市場にもち出されたとしたら、〔第二年度に〕ぶどう酒なり他の商品なりに投下されたであろう労働とに比例する、と主張するのは正しいのではないだろうか。」⁽³⁷⁾

リカードウによれば、回収に二年を要する資本によって醸造されたぶどう酒の価値は、第一年度にその生産に現実に投下された労働量に比例して産出された価値額が、かりに第二年度に労働の雇用のために資本として使用されたとすれば、雇用したであろう労働量に比例すると考えるべきだというのである。そして、かれは回収に二年よりもさらに長い年月を要する資本によって生産される商品の価値についても、同様の手続きによって測定することができる⁽³⁸⁾と主張する。「同様に、樹齢100年の樫の木は、おそらく初めから終りまでにたった一日の労働しかそれに投下されなかったのだろうが、その価値は一日分の労働に対する複利による利潤によって蓄積された資本と、これだ

(36) *Works*, IV, pp. 386—7.

(37) *Works*, IV, p. 387. ただし、傍点は引用者の施したものの。なお、邦語版『リカードウ全集』のこの箇所の訳文には疑問がある。

けの蓄積資本がかりに労働を雇用したとすれば、それが年ねん雇用したであろう労働量とに依存する。」⁽³⁸⁾と。

以上で明らかになったように、リカードウが永年苦慮したのは、ぶどう酒や樹木のように、その回収に多年を要する資本によって生産される商品の価値がその生産に現実に投下された労働量に應ずるよりもはるかに大きいという点を、かれの立脚点である労働価値論に抵触せぬように説明するにはどう考えたらよいのかということであった。ここでかれは事実上において投下労働量によって規定されるものとしての価値と平均利潤によって規定されるものとしての自然価格との乖離を認めていたことになる。しかし、そうはいつでもかれがこの乖離を認めたのは、事実上のことにすぎないのであって、けっして価値と自然価格との範疇的区別にかれは到達していたわけではない。だから、かれは商品の自然価格そのものが直接にその生産に投下された労働量に比例するはずだという命題に頑なに執着したままで、このぶどう酒や樹木の異常に大きな価値を説明する道を摸索したのであった。だが、ぶどう酒や樹木の価値が現実に投下された労働量に比例するよりもはるかに大きいということを認めること自体、客観的にみれば、労働価値論の自己破産の告白にほかならないだろう。ところが、リカードウ自身は「不変の価値尺度」を見つけ出すことができれば、労働価値論の立場を放棄せずにこの難問を説明できるにちがいないという確信をもちつづけたのであった。かれは思索をめぐらした結果、一年間にわたる労働の所産のなかから価値尺度を選定し、この尺度によって各種商品の価値を一年に一度ずつ測定することを提案した。これによって各種商品の絶対価値が投下労働量に正確に比例していることを明らかにすることができるにちがいないというのである。

この場合、リカードウにとっての最大の難問であるぶどう酒や樹木の価値はどのように測定されるのだろうか。すでに知ったように、かれは回収に多

(38) *Works*, IV, p. 388. なお、邦語版『全集』のこの箇所の訳文には疑問がある。

年を要する資本によって生産された商品の価値については、それを一年間にわたる労働の所産としての価値尺度によって一年ごとに測定すべきだと提唱する。かれの掲げたぶどう酒の例について再論すれば、資本投下後一年のぶどう酒の価値はその生産に現実投下された労働量に正確に比例するが、貯蔵後一年のぶどう酒の価値は、貯蔵直前のぶどう酒の価値が雇用することのできる労働量に正確に比例するというわけである。回収に長時間を要する資本を用いて生産された商品は、回収時間の長さに応じて利潤が累積されるためにその価値を増すわけだが、リカードは一年間にわたる労働の所産としての価値尺度をもって一年ごとに当該商品の価値を測定することによって、累積された利潤を労働量に還元するという処理方法を提唱する。かくして、ぶどう酒や樹木の価値は、その生産に現実投下された労働量によって産出されるはずの価値額がかりに労働を雇用するための資本として使用されたとすれば、雇用したであろうという虚構の労働量に比例するというのである。

要約しよう。リカードは価値と自然価格との乖離を事実上認めた。だが、ここに乖離を認めることは、リカードの基礎的立脚点たる労働価値論に重大な欠陥があったことをかれ自身が認めることになる。かくして、かれはこの欠陥を補強する必要を痛感した。しかし、かれの補強作業は、かれが価値と自然価格との範疇的区別に最後まで気づくことなしに行われたのであり、それがかれの補強作業に「不変の価値尺度」の探索という形をとらせたのであった。だから、かれは商品価値を労働量に還元することに成功したけれども、それは虚構の労働量への還元という結論に到達するほかなかったのである。

さて、リカードは「第一草稿」の最終段落でかれ自身の上来の所論をみずから要約しているから、われわれも本稿を閉じるにあたってそれについて見ておこう。かれはつぎのように述べている。

——われわれが日常接するさまざまな商品を生産するために使用される資

本の回収期間は同一ではない。このような場合には、そのなかからどのような商品をわれわれの価値尺度に選んでも、「すべての物にとって正確な価値尺度はありえない。」⁽³⁹⁾一方の極端には、小えびのように、わずかに一日の労働を維持する資財だけしか使用せずに生産される商品があり、他方の極端には、ぶどう酒や樹木のように、回収に多年を要する資本を使用して生産される商品がある。そして、両極の間には一年間にわたる労働の所産としての穀物のような商品がある。(なお、リカードウはここでは毛織物や金も穀物と同じように一年間にわたる労働の所産と仮定して議論をすすめている。)⁽⁴⁰⁾

さて、価値尺度はこれらの諸商品のなかから選ばなければならないが、いったいどれを尺度に選んだらよいのだろうか。ところが、リカードウは「この選択はある程度恣意的であって便宜によって支配されているにすぎないだろう」と述べるとともに、「人びとの間の交易の対象である商品のなかのきわめて大きな割合」を占めている商品と同一の生産条件の下で生産される財貨を価値尺度として選ぶべきだと提唱する。そして、かれは「第一草稿」の論述全体をみずから総括する一文をつぎのように書き記したのであった。

「これは確かなことだが、もし人びとの間の交易の対象である商品のなかのきわめて大きな割合が、金や毛織物の生産条件と同様の条件の下で生産されていて、一年間使用された労働と資本との所産であるとすれば、その場合には、金や毛織物は（それらがその生産に正確に同一量の労働と資本とを必要としている限り）最も適切な価値尺度であり、そこでわれわれは、他のすべての物の絶対価値の騰落について論及する場合、つねにこの尺度に照らし合わせてみなければならないのである。」⁽⁴¹⁾

リカードウは『原理』第3版ですでに、諸商品の相対価値を隔たった時点

(39) *Works*, IV, p. 389.

(40) Cf. *Works*, IV, p. 389.

(41) *Works*, IV, pp. 389-90. ただし、傍点は引用者の施したものの。

で変動せしめる原因がふたつあること、すなわち第一の原因はこの期間にある単一もしくは複数の種類の商品の生産に必要な労働量がなにごとか増加もしくは減少したことであり、第二の原因はこの期間に賃金の騰落による利潤率の変動が起ったことであると説いていた。だが、かれは固定・流動資本の組合せの点でも、使用される固定資本の耐久度の点でも、また資本の回収期間の点でも、社会の全産業部門のなかで中位にある部門の生産物を価値尺度に選ぶことによって第二の原因による相対価値の変動が「比較的軽微」であることを示すことによって、相対価値を変動せしめる主要な原因は第一の原因とみるべきだと主張したのであった。このようにしてかれは経済学の全体系が依然として投下労働量による価値規定の基礎のうえに立脚すべきことを主張したのである。

しかし、リカード自身第3版の当時すでに、上述したような自説のなかには、論及すべきでありながら論及していないひとつの論点があることに気づいていた。その問題点というのは、隔たった時点で諸商品の相対価値が変動した場合、この変動が果してなんらかの商品の絶対価値の騰落によるものかどうかを明らかにしなければならないが、それには各種商品の絶対価値を正確に測定しなければならないという点であった。この期間にどの商品の絶対価値が不変であり、どの商品の価値がどれだけ騰落したのか、という点をどのようにして捉えたらよいのだろうか。これがリカードが『原理』第3版以後に自分自身に課した研究課題だったのであり、かれは「絶対価値と交換価値」と題する遺稿のなかでその課題に対する一応の解答を以上のように書き与えたのであった。そして、すでに知ったように、「不変の価値尺度」の選定という形で行われたかれの解決の試みは、客観的にみれば労働価値論の自己破産を告白するものでしかなかったけれども、商品価値だけでなくその自然価格がその生産に投下された労働量に直接に比例するにちがいないという形でしか労働価値論の定式化をはかれなかったリカードにとっては、主観的には、諸商品の生産に使用される資本の回収時間の差異のために破綻せし

められたかれの命題を補修し強化するための企てにほかならなかったのである。

1823年8月末にはリカードウはすでに「第一草稿」をすべて書きあげたうえで、その改訂をはかりつつ「第二草稿」を執筆しはじめていた。9月5日かれが発病してペンを棄てざるをえなくなった時には、「第二草稿」はかなりの分量が書かれていた。だが、この9月5日に、かれは内耳に発生した腫瘍による激痛に襲われる直前に、ジェイムズ・ミルあてに手紙を書いて、価値の問題につぎのように言及していた。

「12か月にわたる一人の労働〔の所産〕はひと月の間の12人の労働〔の所産〕よりも大きな価値があります。……5年間の利潤は一年間のその5倍よりも多く、一年間の利潤は一週間の利潤の52倍よりも多いのであって、これが困難の大部分をつくり出しているのです。……最近この問題について考えつづけてきましたが、たいした進歩はありませんでした。」⁽⁴²⁾

価値と自然価格との範疇的区別を見出すことができなかったリカードウにとっては、諸商品の生産に使用される資本の回収時間の差異のために価値と自然価格との間に生ずる乖離を投下労働量による価値規定に抵触することのないものとして説明しきことは、はなはだしく困難な課題だったにちがいない。このミルあての手紙の文面からみても、リカードウは論説「絶対価値と交換価値」をかれ自身にとって満足できるほどに仕上げるまでにはなお苦悩しなければならぬ難問がいくつか残っていることに気づいていたのかもしれない。

(42) *Works*, IX, p. 387.